

詩余ものがたり 北宋篇（三）

詩余ものがたり 北宋篇（三）

— 清・葉申薌『本事詞』 —

松尾肇子

三十三、蘇軾と大通禪師、仲殊

蘇軾が杭州にいたとき、休日にはしばしば西湖に行きました。ある日芸妓を連れて大通禪師を訪ねたところ、大通はむっとして色にでました。蘇軾はからかって短い詞を作り、芸妓にそれを歌わせました。詞というのはこうです。

和尚が歌うのは誰の曲、

教えは誰にうけられましたか。

あなたの拍板と門槌とを借りて、

私もこの場に合わせて芝居を演じてみせますゆえお疑いめさるな。

溪の娘がのぞき見したといって、

山の僧は眉間にしわをお寄せなさらぬように。

お気の毒にも弥勒様はこの世に下るのが遅く、

おばあさんが十五歳だった若い時を見なかった。

仲殊は当時蘇州におり、これを聞くと和韻の詞を作って送りました。

〔清平楽〕をよく舞うと

今言ったのははてどなた。

真つ赤な炉に降る白い雪（のごとくに迷い）を溶かし鉗槌を振りかざし

金毛の獅子（に乗る文殊菩薩のごとき和尚）を打ちまかしたのは疑いなし。

木彫り人形（のような娘）は目を開き、

泥人形（のような和尚）はひそかに眉を寄せる。

蟠桃がもはや花を付け遅れ、

東風に向かつて一笑みしないというのなら、

いったいいつ咲くというのか。

皆はうまい冗談だと言いました。

三十四、蘇軾と二人の妓女

林希（字は子中）が潤州の知事だったとき、蘇軾が杭州から召し出され、郡を通りかかったところ、林希は宴を開いて引き留めました。席上、二人の宮妓が文書を取り出し、鄭容は身請け（落籍）を、

高瑩は嫁入り（従良）の許可を求めました。林希が文書を客に見せるよう命じますと、蘇軾は即座に文書の後に詞を書きました。

鄭莊（のように林知事）は来客が大好きで、

私が酒席で頭巾を落としたのもお許しくださった。

筆を下せば風が吹き起こる（ような文才をお持ちで）、
とどろくような名声が都に満ちた。

高い山は白くなるのが早いもの（すぐに白髪を頂くことになるけれど）、

玉のような骨 氷のような肌（の娘）にどうして老いが分かりますか。

これからこの南徐の地では、
良い夜 清らかな風が吹き 月影が湖に満ちるだろう。

蘇軾は文章で冗談を言うのが大好きでした。おどけてみせたとは言え、良い話です。

（訳者注：原文では「減字木蘭花」詞の行頭が「鄭容落籍高瑩従良」となっている。）

三十五、蘇軾と陳慥

龍邱先生が洛陽から蜀へ行くのに、二人の軍装した侍女を駿馬に乗せ、山水の美しい場所に至るたびに数日間逗留したので、見た人は仙人ではないかと疑いました。十年後、黄岡に住まいを建て、一人住まいして道を学び、自ら静庵居士と名乗りました。蘇軾は「臨江仙」を作ったことを記して次のように言いました。

詩余ものがたり 北宋篇（三）

やせ馬が遠くまで載せたのは二人の侍女、
青い頭巾 玉のベルト 赤い靴。

山水の美しい所が我が家。

誰が思っただろうか 巴峽の山道で、
なんと洛陽城の花を見られようとは。

その顔はくるくる舞い落ちる花か 風に飛ぶ玉の蕊か、
人の住むこの世に春の日差しが傾く。

十年というものが仙人が乗る紫の雲の車を見なかった。

龍邱に道士の住まいを新築し、
鉛の鼎で丹砂を練っている。

龍邱先生とは陳慥（字は季常）で、蘇軾が他の詩で（妻を恐れる彼を）、

河東の獅子の吼えるのを耳にすると、
杖をつき手を垂れて心は茫然とする。

というその人です。思うに歌姫を載せて長旅をしたのも、またきつと理由があったのでしょうか。

三十六、蘇軾と王鞏の歌姫

王鞏（字は定国）が嶺南から帰ってくると、蘇軾が立ち寄ったので、引き留めて宴を開きました。その席に自分の家の柔奴という歌姫を侍らせました。蘇軾が柔奴に「嶺南の風土はきつと好くなかっただろう」と尋ねると、「この心が落ち着くところこそが、私の故郷でございます」と答えました。蘇軾は彼女の応対のすばらしさを好ましく思

詩余ものがたり 北宋篇 (三)

い、彼女のために〔定風波〕を作りました。

いつも羨ましいのは、人の世の玉のような美男子に、
バターのようななめらかな肌の美女を天が与えたこと。
清らかな歌を作って白い齒の彼女に伝えた。

(彼女が歌えば) 風が起こり、
雪が飛んで燃える海も涼やかになる。

万里のかなたから帰って来るとますます若返り、
かすかに笑い、

笑うと嶺南の梅の香りがするようだ。

試しに嶺南はきつと好くなかっただろうと尋ねると、
なんとこう言うのだ、

「この心が落ち着くところが私の故郷です」。

三十七、蘇軾の悼亡詞

朝雲は、姓を王氏といい、錢塘の売れっこ芸妓でした。蘇軾が杭州の知事として赴任したとき、妾として家に納れました。朝雲は機転がきき聡明で、まったく字を知りませんでした。蘇軾に仕えてから、書を学び、楷書をほぼ会得しました。また、仏教を学んで、大事などころにはほぼ通じました。蘇軾が南方へ左遷されると、家の歌姫の多くは去って行きましたが、朝雲だけは一緒に行くことを願い、蘇軾はますます彼女を愛しました。まもなく、朝雲は病氣にかかり、死に際に金剛經の四句の偈を唱えて息絶えました。惠州の棲禪寺の松の下に葬られました。蘇軾は彼女のために〔西江月〕の詞を作って悼みました。それは次のようです。

玉の骨はどうして瘴気を含んだ霧を愁えるだろうか、
水の肌には仙界の風をまといつていた。
海の仙人が折りしも通りかかり 芳香の草むらを探って、
なんと緑の小さな鳳を取った。

白い顔はおしろいを嫌い、
化粧を落としても唇の紅は色あせない。

私に尽くしてくれた彼女はもう暁の雲を追って行ってしまい、
梨の花と一緒に夢を見ることはない。

思うに梅の花で喻えたのでしょうか。

三十八、蘇軾と朝雲

蘇軾が惠州にいたとき、朝雲がそばに座っていました。折しも初霜が降り、さわさわと落ち葉を散らし、寂しく宋玉のように秋を悲しみました。そこで朝雲に命じて酒を用意させ、「花の紅褪せ」で始まる〔蝶恋花〕の詞を歌わせて愁いを払おうとしました。朝雲は真珠のようなのをふるわそうとしましたが、おしろい混じりの涙で胸元を濡らしました。蘇軾がそのわけを問うと、答えて言うには、「私が歌えないのは『枝の柳絮を吹いてまた少なく、空の果てのどこに(愁いをもたらず) 香り草が無いところがあるだろうか』だからです。」蘇軾は大笑いして「私はまさに秋を悲しみ、おまえはまた春を傷むのだね」と言って、やめました。ほどなく朝雲は亡くなり、蘇軾はそのために死ぬまで二度とこの詞を聞きませんでした。

三十九、蘇軾と温都官の娘

蘇軾が惠州ケイシンに流されたとき、温都監という人がいて、その娘はた
いそう美しく、年頃になっていました。嫁入りしようとはしませんでした。
蘇軾が来たことを聞くと、ひそかに「あのかたが私の夫です」
と人に言いました。蘇軾がたまたま隣に住まいし、毎夜詩を詠じるの
を聞くと、娘は庭の隅を行ったり来たりしてこっそりと耳をすますの
ですが、蘇軾が気づいて窓を押し開けると、身を翻して行ってしまう
ます。蘇軾は追いかけて捜しました。温都監が事の次第を詳しく話し
ますと、蘇軾は「私がよい相手と呼んで、結婚させるべきですね」
と言いました。ほどなく、蘇軾は海を渡ってケイシン海南島へ行ったので、
この話はそのまま立ち消えとなりました。この娘は間もなく世を去り、
沙州のそばに葬られました。蘇軾は南から戻り、惠州に立ち寄って、
この娘がすでに亡くなっていることを知ると、悲しんで「卜算子」詞
を作りました。それはこのような詞です。

欠けた月がぼつんと立つ桐にかかり、

水時計の音も絶えて（夜も更け）人はようやく寝静まった。

その時もの静かな人が一人行き来するのを見た、
はるかな空の孤独な鴻の影。

驚いて立ち上がり 振り返っても、

顧みる人もない恨めしさ。

葉の落ちた枝を選び尽くしても巢をかけようとせず、
ひっそりと沙州は冷たい。

この詞は、蘇軾が黄州コウシュウにいたときに王氏の娘のために作ったと言
われたこともありますし、「賀新郎」の詞にいたっては側仕えの榴花
のために作ったと言いますが、どちらも伝え聞くうち話が変わっ
たのでしょうか。

詩余ものがたり 北宋篇（三）

四十、蘇軾と春夢婆

蘇軾は（海南島の）儋耳タンで、大きなヒョウタンを背負って、畑の間
を歌いながら歩いておりました。歌うのは、いづれも自分で作詞した
〔哨遍〕でした。おりしも一人の老婦と行き会いますと、蘇軾に言い
ました。「学士さまの昔の栄華は、一場の春の夢に過ぎません。」蘇軾
は笑い、この老婦を「春の夢のおばあさん」と呼びました。

四十一、蘇軾が妓女に贈った詞

蘇軾は吟詠を好み、詞集には宴席で贈った詞が多く収められていま
す。楚州シュウの知事であった田待制（字は仲宣）の輪まげを結った若い
歌姫に贈ったのには、〔浣溪沙〕二首があります。その一は次のよう
です。

月形の眉を描きはじめてばかりのお年頃。

町を挙げて苦しむほどの艶やかさ。

短い因縁を歌うあの曲は歌わないでくれ。

霧に煙るとばりの中で笙を吹けば香りもたゆたう。

霜の降りた庭で舞えば月が輝く。

曲が終わると赤い袖が小さな纏足におちかかる。

その二は次のようです。

世間を夢見て五年が過ぎた。

帰ってきてみれば風物はもとのまま。

詩余ものがたり 北宋篇(三)

一緒に酔うのも前世の因縁か。

仙界からもどってきた客人はいつも煩悶すべきではない。

長官が年若い舞姫を出してくれたのだから。

緑の黒髪ゆたかなまげにかりそめに短い詩をまかせよう。

また黄州^{コウシュ}の長官だった徐大受^{じょたいじう}(字は君猷^{くんゆう})の三人の侍女に贈ったのが三首の「減字木蘭花」です。撫卿^{ぶけい}に与えたのは次のようです。

なよなよとなまめかしく、

柳の枝のように軽やかに様々な姿態を見せる。

主人にも客人にも 困ったかのように咎めるかのように、

眉をしかめて喜んだりすねたり。

主人の徐君は楽しく飲み、

笑うもからかうも君の思いのまま。

柔らかなしろい顔は赤くなり、

赤い闌干に花のようにもたれかかって風を包みこむ。

勝^{しょう}之^しに贈ったのはこのようです。

輪にした二つのまげは落ちかかるほどの黒髪、

愛らしい瞳で流し目をおくり眉は黒い。

ひらひらと妙なる舞い、

手のひらに乗るほどの身を軽やかに翻す姿はあでやか。

曲が終われば力尽き、

笑いながらしなだれかかってよい香りの息であえぐ。

年寄りはいれしくて、

かすむ目でも子細に見えるようだ。

慶姫^{けいぎ}に与えたのは次のようです。

純粹な天性 雅やかで麗しく、

姿かたちはやさしく 心は聡い。

響き渡る声は、

みどりの黒髪に収まりきらず 空を行く雲をおしとどめる。

素晴らしい歌詞 ここちよい曲、

途切れるか続くか ころがすように新曲を歌う。

客人に気を配って、

金の大杯いっぱい玉のような手で酒を注いでくれる。

また、徐大受の家姫の懿懿^{いゐ}に「減字木蘭歌」を贈って次のように言いました。

穏やかで優しい生まれつき、

雅な呼び名は良い名で懿懿。

舞もできれば歌も歌え、

ころあいの年頃で上品だ。

眉は長く目元はすっきり、

うっすら掃いた白粉 最新のスタイルに結い上げたまげ。

悩ましげな風情は、

春の花をつけた枝が様々な姿を見せるよう。

また楚州の長官だった周予の舞姫に贈ったのには、「南歌子」二首があります。その一は次のようです。

紺色のリボンでふたつのまげを結わえ、
雲のように豊かな黒髪にちよつと斜めにかぶり物。
たおやかに顔を赤く染めて細い腰、
鼓が細かなリズムで舞を促すと心を高ぶらせる。

空は広く紅の花びらは散りおさめ、
風は優しく柳の新芽にからみつく。
蓬萊山に集まった皆さんの才気あふれる詩は清らかに新鮮で、
舞の褒美に頭にまとわせた錦にも勝り、どちらも大切にしまっておこう。

二首目はこうです。

琥珀の帶玉、
龍涎香が襟元に香る。
趙飛燕の生まれ変わりか、
ネギのように白い手で思いを凝らして舞うのを共に見る。

柳のわたが風に舞い、
梅の花が雪の中で春を告げる。
オシドリやカワセミはともに新しさを争うが、
ただ一人周君の目を引きつけて真珠にもまさる。

また、陳縝（字は公密）の侍女で「紫玉簫」を歌うことのできた素娘に贈ったものには、「鷓鴣天」があり、次のようです。

詩余ものがたり 北宋篇（三）

笑って紅梅を手には翡翠の羽の髪飾りを垂らしている。
揚州十里に並み居る芸妓のなかでも一番あでやか。
ゆうべは宴の席で親しくお会いし、
摘み取ったのは艶めかしさ。

振り返る流し目、
舞う腰つき、
劉郎は幾度も魂も消し飛びそうだった。
翌朝酒が醒めるのはどこだろう、
雲間に紫玉簫を聞いてはらわたをちぎられるのだ。

また、田国博（字は叔通）の若い舞姫に贈ったのには、「南郷子」があり、次のようです。

（昼は）美しいむながい玉の環で遊び、
（夜は）明るい灯火が粗い簾からこぼれるけれど笑いは内に収まる。
長く待たせたよい香りの車が急きたるので乗ろうとしては、
また留まり、
さらに薄紅の唇に杏の油をさす。

速いリズムの花遍六公の毯、
顔はつむじ風に舞う雪のよう。
春は金糸の衣の柳腰に入り、
軽やかに柔らかく、
柳を植えたのはきっと柳柳州殿に違いない。

詩余ものがたり 北宋篇(三)

また、都尉の王誼(ぎ)(字は晋卿しんけい)の侍女に贈ったのでは〔婦人嬌〕があり、次のようです。

庭いっばいの桃の花、

どれも劉郎はまだ見ていない。

なかでも一枝 いっそう細く柔らかい。

仙人は日ごと月ごと、

人の世の春が遅いのを笑っている。

深い眠りから起きてみれば、

乱れ飛ぶ千の桃の赤い花びらに驚いたのだった。

ひそかに何を思っているのか、

恥ずかしそうな面差しがあらわれる。

(そうすると) わけもなく、

あなたのために腸が断たれる。

君に尋ねる 一日中(彼女と居て)、

どうやって心を落ち着かせるのかと。

きつと、

司空殿は見慣れているからなのだ。

美人の足を詠じた〔菩薩蛮〕は、いちばん清らかで美しいと思うのですが、その詞は次のようです。

惜しげもなく香料を塗り 連で歩みを受けたのに、

薄絹の靴下が波を踏んで去って行ったのをずっと悲しんでいる。

ただつむじ風が舞うのを見るだけで、

まったく足跡も無い。

こっそりと履いているのは宮中で流行の靴。
並んで立って二つの足は困ったかのよう。

その小さく精巧な足は何とも言いようがなく、
手のひらに載せて見るしかない。

これは物を詠じて思いを描き、その素晴らしさを言い尽くしており、
(蘇軾の詞は) どうしてまたドラを叩いて歌う勇ましい歌ばかりであ
ろうか。